

転生賢者は娘と暮らす。01

琴平 稜



ファンタジア文庫

2778

CONTENTS

第一章	社畜、死す	005
第二章	異世界転生	012
第三章	孤児院はじめました	026
第四章	生活の基盤を作ろう！ & 娘たちと仲良くなろう！	053
第五章	食料を買おう&アシュリー覚醒	070
第六章	すくすく育てよう&召喚しよう	105
第七章	資金を集めよう	125
第八章	野菜を収穫しよう	167
第九章	ごちそうを作ろう	181
第十章	友達を作ろう 1	204
第十一章	友達を作ろう 2	220
第十二章	強盗を撃退しよう！	241
エピソード	大賢人、密かなる仇討ち	251
あとがき		264

口絵・本文イラスト
かぼちゃ

第一章 社畜、死す

「……………あ……………」

沈んでいた意識が、深海から引き上げられるようにして、ふっと浮かび上がる。まぶたをほどく。

開いた視界に、一面の白が映り込んだ。

「……………」

気付くと、おれは見知らぬ空間に仰向けに寝ていた。起き上がって、見渡す。

「……………どこだ、ここ？」

何も無い。

果てのない地平線、その先まで、どこまでも無機質な白が続いている。ぼうっと座り込んでいると、突如として眼前に逆さまの顔が現れた。

「目が覚めたかい？」

「うおっ!」

驚きのあまり飛び退いて、振り向く。

いつの間に現れたのか、そこには艶やかな黒髪をひとつに結び、書類を抱えた人物が立っていた。顔立ちが整いすぎていて、女性か男性か判然としない。パリッとしたスーツに身を包み、そして何の冗談か、背中に純白の羽を背負っている。

「初めまして。私の名はラディエル。ようこそ、死後の世界へ」

「は、初めまして、おれは——って、死後!」

ラディエルと名乗った人物は、表情ひとつ変えずに頷いた。

「正確には、輪廻の狭間だが」

「リンネノハザマ……」

まだ状況が呑み込めない。

ラディエルが書類をめくりながら尋ねる。

「大成賢人くんで間違いないか?」

「は、はい」

「突然だが、きみは死んだ」

「え」

「死因は過労死だ」

「過労、死……」

ほんやりと立ち尽くす。

思い当たる節はあった。

過剰なノルマに、サービス残業の嵐。大声で怒鳴り散らす上司に、仕事ができないふりをしてすべておれに押し付けて帰る後輩。始発で出社して、終電で帰る毎日。そんな日々が十年近く続いて、固形携帯食を詰め込んでいた食事も、ついにはゼリーしか受け付けなくなつた。

そして、連勤記録を更新した二十三日目の深夜、人間ってけっこう丈夫なんだなんて思いながら、アパートの階段を上りきったところまでは覚えてる。

そうすると、ここは本当に死後の世界なのか。

ラディエルは書類を閉じると、痛ましげに眉をひそめた。

「きみは、あまりいい人生を送れなかったようだな」

「そうですね」

「すまない。きみが前世でこんなにも不幸だったのは、こちらの手違いだ」

「手違い……」

「そこできみには、私の管轄する別の世界に、好きな条件で転移してもらおうことになった」

「転移？」

「むろん、転生でも可能だ。きみが望むなら、赤子からやり直すこともできる。年齢も環境も容姿も才能も思うがまま、新しい世界に生まれ変わってもらおう」

つまり、前世が不幸だった分、望む条件で第二の人生を始められるということだろうか？

ラディエルが両手を広げる。

「このラディエルの名にかけて、今度こそ希望に満ちあふれた人生を約束しよう。さあ、なんなりと言ってくれたまえ」

そのいかにも天使然とした姿を見るうちに、小さな呟きが、唇から転がり落ちていた。

「働きたくない」

「んっ」

「もう働きたくない」

ラディエルがうなずく。

「承知した。では一生遊んで暮らせるよう、広大な領地とそれに見合った地位、豪華な屋

敷、数多の召使い、そして莫大な財産を——」

「あ、あの、そういうのじゃなくて」

ラディエルの形のいい眉がびくりと跳ね上がった。

「と、いうと？」

「たいそうな身分も、金もモノもいりません。おれはただ、健康な肉体と、新しい世界についての必要最低限の知識、そして大自然に囲まれた、庭付きの小さな一軒家があれば、それでいいです。そこで自給自足の隠遁生活を送りたい」

「そんなものでいいのか？ 富も名誉も、思いのままなのだぞ」

「もう、あくせく生きるのに疲れたんです。第二の人生では、ゆつたりのんびり生きたい。細々とでもいいから、一生誰にもわずらわされず、一人でのんびり静かに暮らしたい。望みはそれだけです」

するとラディエルは真剣な顔で考え込んだ。

「……のんびり静かに、か」

「だから、容姿はこのままでいいです。名前も。年齢は……せつかくなら、少し若くしてもらってもいいですか？ 新しい世界でののんびりライフを、長く楽しみたいし」

「それは、もちろん可能だが……本当にいいのか？」

そう念を押されると、何か特別なお願いをしたほうがいいのかという気になってくる。うーん、異世界でのんびり暮らすのに必要そうなもの……

「あ、そうだ。なんか、こう、野菜が育ちやすい能力とかがあつたらいいな」

思えば家庭菜園に詳しいわけでもないし、自給自足生活を送る上で、そんなスキルがあつたら便利だろう。

「なるほど。少し待っていてくれ」

ラディエルはそう言つて、書類をめぐり始めた。

「野菜を育てるスキル……野菜……これは違うし、これも……うーむ」

どうやら、ちょうどいいスキルが見つからないらしい。考えてみれば、異世界に転生するのに『野菜をすくすく育てるスキルがほしい』なんて願う人、あんまりいなさそうだな。そもそもそんなスキル自体ないのかもしれない。悪いことしたかな。

が。

「ああ、これならいけそうだな」

ラディエルが書類を閉じた。

「安心してくれ、賢人くん。ぴつたりのスキルが見つかった。このラディエルが、のんびり静かなスローライフを約束しよう」

「ありがとうございます」

ラディエルが頷くと同時に、閉じられていた翼つばさがぶわりと広がった。純白の羽根はねが舞い散る。

「それでは、転移を開始する。目を閉じて、リラックスしてくれたまえ。よい異世界ライフを」

その言葉を最後に、瞼まぶたの裏が真っ白い光に染められた。

第二章 異世界転生

凄まじい風が舞い上がったかと思うと、ふわりと浮遊感があつて、数秒後、足の裏が硬い地面を捉えた。

光がおさまるのを待つて、うつすらと臉をほどく。

「おお」

おれは、見知らぬ街に立っていた。

石畳の左右に露店が並び、そこかしこで賑やかな客引きの声がある。旅人らしき、荷物を担いだ人々が、店を覗き込んでいた。

見下ろすと、自分も彼らと同じような、ごわごわした服を着ていた。腰に剣がさがつていてちよつと驚くが、見れば道を行く人たちもほとんど剣を携えていた。これが普通なのか。どうやら転生早々銃刀法違反で逮捕されるなんていう悲劇はなさそうぞ。

胸をなで下ろしながら再び剣を見下ろすと、柄に名前が刻まれていた。

ケント・オーナリー。

なるほど。名前もそのままでもいいと言つたが、この世界風アレンジされているらしい。

明らかに日本語ではないが、文字も普通に読めるし、周囲から聞こえてくる会話も理解

できる。

と、

「どいた、どいた」

「兄ちゃん、危ないよ」

慌てて避けると、目の前を果物を積んだ荷馬車を通つていった。

「お、リンゴだ」

どうやら、食べ物元いた世界とそう変わらないらしい。馬も、おれの知っている馬と同じだ。

ひとまず安堵する。

「でも……」

辺りを見回す。大自然に囲まれた、庭付き一軒家を希望したはずだが……ラディエル、忘れてるのかな？

「まあ、よく考えたらゆくゆくは自給自足するにしても、当面の食料とか生活用品は必要

なわけだし……とりあえず散策してみるか」

おのぼりさんよろしく辺りを見回しながら、通りを歩く。

ちょうど昼を過ぎたところで、街はたくさんの人で賑わっていた。

ラディエルの計らいか、ポケットに銅貨が入っていたので、道ばたの露店で黒パンと野菜、リングゴ、そして野菜の種をいくつか買収求めた。

「野菜を売っている年配の女性に聞いたところによると、この街は『ヴァイラシア』というらしい。フェルテスという巨大な大陸の、ほぼ中央に位置している。人口五万人。この世界ではけっこう大きな規模に入るようだ。

「兄ちゃん、なんだかひよろっこいねえ。リングゴをおまけしとくから、ちゃんと精を付けるんだよ」

「ありがとうございます」

もらったリングゴをかじりながら歩いていると、時折『冒険者』らしきパーティーとすれ違った。

おれの頭にはあらかじめこの世界の基礎知識がインプットされているようだった。脳のひだに収納されているそれを、少しずつ引き出していく。

この世界には魔物がいて、それらを倒す冒険者——剣士や魔術士といった職業の人たち

がいるらしい。

「剣とか魔術とかが、普通に生活に根付いているのか。すごい世界だな」

まだ魔術を使っている人を見かけていないが、どんなものなのだろう。見るのが楽しみだ。

魔物は怖い^{こわ}いが、冒険者のおかげで平和が保たれているらしく、街の人たちの表情は明るくて、どこか牧歌的な雰囲気^{ふんいき}が漂^{ただよ}っていた。うん、毎日急かされるようにして働いていた元の世界よりも、水が合いそうだ。

行き交^かう人をよく観察してみると、青い髪^{かみ}だったり、赤い瞳^{ひとみ}をしていたりと、元の世界ではなかった特徴^{とくちょう}が見受けられた。

さらに散策を続けたおれは、妙な光景に気が付いた。きれいな花壇^{かだん}や噴水^{ふんすい}の陰^{かげ}、共用かまどの横など、そこかしこで、虹^{にじ}のような光がきらきらと舞っているのだ。色とりどりの光の粒子^{りゅうじ}が寄り集まった様子は、小さなオーロラを思わせた。とても綺麗^{きれい}だが、誰も気にしていない。この世界ではありふれた現象なのだろう。

本当に異世界に来たんだなあなんて、今さらのように実感する。

「ここがギルドか」

煉瓦^{れんが}造りの立派な建物を見上げる。

ギルドとは、各町や村に置かれている冒険者の拠点で、ここでクエストを受けたり、報酬を貰ったりするらしい。

が、

「まあ、おれには関係ないか。冒険者を目指してるわけでもなし」

ちよつと外観を見ただけで、ギルドを後にする。

この世界では、おれは『ちよつと野菜を育てるのが得意な一般人』だ。せつかく初期装備に含まれている剣も、まさに無用の長物だ。

「しかし、基礎知識をインプットした状態で転移できるなんて、便利だな」

心の中でラディエルに手を合わせる。

が……その基礎知識が完璧ではないことを、おれはすぐに知ることになるのだった。

自然を求めて公園をぶらついていると、子どもたちが木を見上げている場面に出くわした。

つられて上を見ると、ニャーニャーとか細かい声をする。子猫だ。どうやら木に登って下

りられなくなつたらしい。

「ミーちゃん、ミーちゃん」

飼い主らしい女の子が、心配そうに声を掛けている。

助けてやりたいが、大人が登るには枝が細すぎる。

試しに魔術を使ってみようか。でもどうやって……そもそも、一般人と変わらないおれにも使えるものなのか？

眉間にしわを寄せていると、視界の端で緑色の光がまたいた。

「ん？」

視線を向けると、光の粒子が、まるで誘うように光量を増した。

そつと手を伸ばして触れてみる。

緑のオーロラがくるくると楽しげに渦を巻いた。

「おお」

なんとなく直感する。

もしかして、これが魔術だろうか？ とすると、この光は魔術の素のようなものか。

試しに、光を両手にのせてみた。

集中して念じると、緑の光が手の上で渦を巻き、優しい風が舞い上がる。

けつこう思った通りに動いてくれるぞ。

「よっ……と」

意識を集中させながらそっと両手を差し伸べると、小さな風の渦が子猫へと漂っていった。ふわりと子猫を持ち上げたのを見計らって、手招きする。

降りてきた子猫を両手で受け止めると、光は細かな粒になつて溶けた。

「これが魔術か、すごいな」

生まれて初めて魔術を使った。ちょっと感激だ。そしてすごく便利だ。

子猫にケガがないのを確かめて、女の子に手渡す。

「はい」

子猫を受け取った少女は、しかし、ぼかんとおれを見上げていた。

周囲からどよめきが起こる。

「え、え、え、今……」

「えっ？」

見回すと、いつの間にかたくさんの人が集まっていた。

みんな顎が外れたみたいに口を開き、一様に目を丸くしている。

「ま、魔術……？ いま、無詠唱で魔術を……!?」

「しかも、あんな細やかな制御を……?」

その驚きようにたじろぐ。

「え、え、なんで？ 魔術って普通に浸透してるもんじゃないの?」

だって、魔術士とかいるんですよ？ 普通に生活に根付いてるんですよ？ 違うの?」

おれが戸惑っている間に、人々が血相を変えて公園を飛び出していった。

「き、聞いてください、あの人、いま無詠唱で魔術をっ!」

「魔術士同盟の会長を呼んで、早く! 大賢人さまの再来よ!」

えっ、何!? なんで!? なんでこんな大騒ぎになるんだ!?

「ちよ、待っ……!?!」

わけも分らないまま、慌てて逃げる。

大通りに出た途端、遠く人混みから悲鳴が上がった。

「そいつを捕まえて、引ったくりよ!」

「!?!」

振り向くと、雄牛のようなガタイをしたひげ面の男が、大通りを疾走してくるところだった。右手には凶悪な半月刀を携えている。

人々が悲鳴を上げて道を空ける中、小さな男の子が逃げ遅れた。

進路上に立ち尽くしている子どもめがけて、引ったくりが半月刀を振りかぶる。

「どけ、邪魔だあああああっ！」

「っ！」

考えるよりも先に地を蹴っていた。

右手が、吸い寄せられるように剣の柄を握る。

子どもの前に躍り出るや、銀色にきらめく軌跡が、居合抜きのおどろきの如く一閃していた。

「ぐウっ!？」

男が顔を歪め、その手から半月刀が弾き飛ばされる。

(……っ!?)

決して軽いとは言えない剣を振り抜きながら、おれは驚愕していた。助けなくては、そう思った次の瞬間には、身体が勝手に動いていた。まるですべてがスローモーションに見えて……

はっと振り向く。

男の手を離れた半月刀が、ブーメランのごとく回転しながら、露店の女性に迫っていた。それはよく見れば、リングをおまけしてくれた野菜売りのおばちゃん——

(しまった……!)

とつさに頭の中でイメージを練り上げ、左手を翳した。

空中に漂っていた緑の粒子が集束し、蒼白になった女性の眼前で、半月刀がびたりと止まる。

「あ、あ……！」

おばちゃんが崩れ落ちると同時、半月刀ががらんと地面に落ちた。

腕を押さえてうずくまっっている引ったくりを、街の人々が取り押さえる。

「おい、なんだ、今の剣技は……!？」

「それに、あの魔術……!？」

色めき立つ人々以上に、おれ自身が混乱していた。

「な、なんだこの能力……!？」

自分でも分かる。今のは明らかに素人の動きではない。

(なんでだ!? どうして!? 剣なんて、竹刀はおろか、修学旅行で買った木刀くらいしか持ったことないんですけど……!?)

戸惑うおれを置いてきぼりにして、街の人々のざわめきが、波紋のように広がっていき

「ありやあただ者じゃないぞ……!！」

「あんな一瞬で魔術を発動させるなんて、それも無詠唱で……」

「だ、大賢人さま……!!」

「大賢人さまの再来だ!」

人々が興奮に沸き立ち、地を揺らすようなコールが始まった。

「大賢人さま! 大賢人さま!」

「あ、いや、ちよつ……!!」

目を血走らせた街人たちに迫られて、おれは踵を返して逃げ出した。

どういうことだ!? のんびり自給自足のスローライフを送るはずが、いきなり変なことになってるんですけど!?

死に物狂いで走るおれを、バッファローの群れもかくやという足音が追ってくる。

と、横から聞き覚えのある声があった。

「新しい世界はお気に召していただけたかな、賢人くん」

「ラディエル!」

なんでここに!?

「いったいどうなってるんですか!」

「魔物がはびこるこの世界で『のんびり静かに暮らす』ためには、この程度の能力は必要

だと思っただけ」

「過剰サービス!」

おれの悲鳴などどこ吹く風、ラディエルはおれと併走しながら涼しい顔で説明する。

「本来魔術を使うには、いちいち呪文を媒体にして精霊と契約を結ばなければならないのだが、賢人くんに限っては、精霊と直接リンクできるようにした。さらには剣術、体術、召喚術、槍術、弓術、あらゆる能力において、最強クラスの冒険者十人分に値する。これで命の危機に怯えず、平和に暮らせること間違いなしだ」

「違う、おれが言った『のんびり静かに』ってのは、もう人に思わされたくないっていう意味で——!」

「野菜を育てるスキルもちゃんと付与してあるから、安心してくれ。それでは、よい異世界ライフを」

「ちよつ、聞いて、人の話を聞いて!」

ラディエルは軽やかに手を上げると、どこかへ消えてしまった。気が付くと、街の端まで来ていた。息を切らして立ち止まる。

壁際に追い詰められたおれに、目の色を変えた人たちが群がる。

「大賢人さま、どうか我々魔術士同盟の研究に加わってください!」

「いいえ、ぜひ我ら町立騎士団に加入してください！」

「お願いします、精霊協会にいらしてくださいませ！ 一生掛かっても使い切れない報酬を差し上げますから！」

「ううっ！ 違う、おれはこんな生活望んでないんだ……！」

自分の性格上、ここでどれかひとつでも承諾してしまえば、一生使い倒されることは目に見えている。

もうあくせく働くことに嫌気がさして、ただスローライフを送りたい、その一心でこの世界に転移させてもらったのに……！

助けを求めてさまよわせた視界に、緑の光が入る。その瞬間、おれは手を伸ばしていた。指先がオーロラに触れた瞬間、光粒が身体を包み、足がふわりと地面から離れる。

「おっ……！」

「浮遊術を!？」

とにかくここから逃げなければ。

意識を練り、さらに上昇しようとした瞬間、すぐ近くから声が出た。

「ああ、賢人くん」

「ラディエル！」

戻ってきてくれたのか！ 今からでもいいから、おれを凡庸な一般人にしてくれ！

しかしおれが口を開くより早く、ラディエルは無表情に告げてきた。

「すまない、私としたことが、伝えるのを忘れていた。賢人くんの庭付き一戸建ては、この先の草原にちゃんと用意してあるぞ。では」

「おい、ヴィラール草原に大賢人さまの家があるらしいぞっ！」

「今すぐ馬を飛ばせ！ 何としても我ら騎士団とお近づきになってもらうのだ！」

「いいえ、精霊協会にご協力してもらうのが先よ！」

ああああ！ おれの夢の庭付き一戸建てが特定されたああああ！ もう住めないじゃないかああああ！

おれは泣く泣く、どことも知れない明日を目指して街を飛び立ったのだった。

第三章 孤児院はじめました

草原の中を蛇行する街道や、巨大な川。牧場、街や村。雄大な光景が、眼下に流れる。次々に現れる景色を見下ろしながら、おれは胸を打たれていた。

——世界は広い。

終の棲家になるはずだった庭付き一戸建てのある草原を通り過ぎ、いくつかの山脈を越え、緑深い森が見えてきたのは、日が傾き始めた頃だった。

小高い丘にある森の中、小さな湖を見つけた。

高度を下げ、湖畔の空き地に降り立つ。

意識を研ぎ澄ませ続けたせいかちよつと頭痛がするが、疲労はない。風の衣に包まれて寒さも感じなかったし、魔術って本当に便利だな。

夕日で金色に輝く湖。森を伐り開いて作られた空き地には、古びた教会が建っていた。教会は無人になってから久しいようだった。塗装は色あせ、屋根はところどころ剥がれている。朽ちた十字架を見上げながら、おれは首をひねった。



気候も穏やかで、湖も近くにゐる。来る途中、丘のふもとには小さな街も見かけた。街からほど近く、豊かな森に囲まれた絶好のロケーション。それなのに、なぜ打ち捨てられてしまったのだろう。

……なぜといえば、おれはなぜこんなことになっているのだろう。新しい世界でまったりスローライフを始めるはずだったのに……。まだ頭が混乱している。

ひとまず顔を洗おうと、湖面を覗き込む。そこには見慣れた自分の顔が映っていた。ちよつと茶色がかつた黒髪に、眠そうな目。これといって特徴のない顔立ち。姿形はそのままだに、いくらか若返っている。十七、八といったところか。

「……もうちよつとイケメンにしてもらつてもよかつたかな」

顎をさすっていると、水の底から不気味な顔がぬらりと浮かび上がってきた。

「うわっ！」

後退ると同時に、巨大な影が飛沫をあげて飛び出す。

突如として現れたのは、青い鱗に覆われた化け物だった。人間のように二本足で立っているが、顔は細長く、ぎよろぎよろと動く目は魚そのもの。その手には、凶悪な爪と水かきが付いている。

『グギギ、グギギ』

化け物は不快な声で鳴いていたが、地を蹴るや一気に肉薄してきた。
鋭い爪が振りかぶられる。

「……ッ！」

おれは後ろにステップを踏んでかわしながら剣の柄を握った。

相手の隙を突いて踏み込むと同時、大きくなぎ払う。

銀色の軌跡が弧を描いて、まるで粘土を切るように、化け物の胴体を両断した。

『ギエエエエエエエエ！』

化け物が断末魔の叫びをあげて悶える。その傷口が徐々に黒い霞と化し、最後には宙に溶け消えた。

草の上に、水晶のような欠片が落ちる。

「今のが魔物か」

なるほど、冒険者という職業が必要なわけだ。まだ心臓がばくばくしている。

残された水晶を、おそろおそろ拾い上げた。光に透かしてみると、虹色に光っている。

魔物の核のようなものだろう。何かの役に立つかもしれないので、腰の袋に入れておく。と、湖から激しい水音があがった。

見ると、同じ魔物が次々と這い出てくるところだった。

そうか、この湖、魔物の巣になっているのか。どうやらこれが原因で、教会が寂れてしまったらしい。

剣を握り直すのが、この数を相手にするのは骨が折れそうだ。

「一網打尽にできれば楽なだけだな」

視線をさまよわせると、湖上に青い光が漂っているのが見えた。

両手を広げ、かき寄せるように動かす。おれのイメージに合わせるようにして、青い粒子が沸き立ち、強い輝きを帯びた。

神経を集中させ、魔物に向かって手をかざすと、湖面がざわざわと波立った。水が渦巻き、悶え、せり上がり、やがて天を覆うように立ち上がった波から、無数の鋭い錐が飛び出して魔物たちを貫いた。

「グ、ギ……!?!」

串刺しになった魔物が、次々と消滅していく。

波が収まったあと。湖面は元通り、鏡のように凜いでいた。

「魔術ってすごいな。ラディエルに感謝しなきゃな」

確かに何の力も持たずに大自然に放り出されていたら、あっさり死んでいたかもしれない。さつきはうっかり街中で使ってしまったから騒ぎになったが、要は力の使い方、使い

どころを誤らなければいいだけの話だ。

【魔物以外には魔術を使わない】。

このルールさえ守っていれば、余計ないざごに巻き込まれることもないだろう。

黄金色に染まり始めた空を見上げて、おれは大きく息を吸い込んだ。

「自然が豊かで、空気もうまい。ここをおれの終の棲家にしよう。畑を耕して、自給自足でのんびり暮らすぞ。おれは異世界のTOKIOになるんだ」

ようやく、憧れていたスローライフが手に入りそうだ。おれは今日、この世界に生まれ落ちたのだ。これからは自分の好きなように生きられるのだ。そう考えるとわくわくした。

すでに日はとつぷりと暮れていたので、ひとまず教会に入った。

礼拝堂を抜けると、奥に居住スペースがあった。中は二階建てで、居間、風呂場。台所には小さな食堂も付属していて、食卓や椅子もそろっている。旅人を泊めることもあったのか、ベッドを設えた部屋もいくつもあり、書庫まであるという充実ぶりだ。

埃がひどく、ところどころ崩れてはいるが、暖炉や鋏、調理器具、家具など、生活に必要なようなものは一通りそろっている。

廊下を抜け、奥まったところにある部屋に入る。

ベッドの埃をざつと払うと、おれは眠りに落ちた。

窓から差し込む朝日で目を覚まし、大きく欠伸をする。

記念すべき自給自足生活の一日目。

身支度を整え、外に出た。

空は抜けるように青い。快晴だ。

湖で顔を洗い、ヴィラリシアで買ったリングゴで腹を満たすと、手始めに、鍬で敷地の一部を耕してみた。

社畜をしていた頃よりも身体が軽い。草に覆われていた土が、さくさくと掘り返されていく。

こうして太陽の下で身体を動かすのは久しぶりだ。

気温や森の様子から、どうやら今は初夏らしい。森から吹く風が、火照った身体を冷ましてくれる。土を掘り起こすごとに金色の粒子が立ちのぼって、なんだか生きている実感が強く湧いた。

午後にさしかかる頃には、広めの一軒家ほどの畑が完成していた。

パンを食べて、昼休憩を取る。なんだか黒くて硬くてもさもさしている。もし野菜がうまく育ったとして、収穫できるのはまだまだ先なのだから、もつと食料を買っておけば良かった。明日あたり、森に入って食べられそうなものを探してみよう。もし見つからなかったら、ここに来る前に街を見かけたから、そこまで降りていく必要がある。あまり人と会いたくないが、背に腹は代えられない。

昼休憩を終えると、乏しい知識をもとに畝を作り、ヴィラリシアで買った野菜の種を蒔いた。

「たしか、これが大根で、これがインゲン。麦に、ナス、大豆……これは人参か？　で、こつちが……なんだっけ？」

種や種芋を、一定の間隔で埋めていく。教会の台所にも何かの種があったので、端のほうに植えてみる。

本来ならその野菜に合った季節や肥料、育て方があるのだろうが、いかなせん家庭菜園の知識が足りなさすぎる。ラディエルにもらった『野菜すくすくスキル(仮)』があるとはいえ、どの程度効力を發揮してくれるのか分からないので、頼りすぎるのも禁物だ。教会に何かいい本がないか、探してみよう。

種を蒔き終えると、寝室と台所の掃除に取りかかった。寝室はわりとすぐに終わったが、台所はなかなか骨が折れた。かまどの煤を払い、台という台を拭き上げる。食器や器具をたらいに入れ、湖で洗った。裏にポンプ式の井戸があったのだが、どれくらい放置されているか分からないので、ちよつと怖い。

ところどころ壁に穴も空いているので修繕したい。が、それは後日でもいいだろう。季節柄、多少風が吹き込んだところでそう困らないし、なにより時間はたっぷりある。

埃を払い、ほうきで床を掃く。

日が落ちる前に湖から水を汲んできて、薪を集め、風呂を沸かした。幸い石けんも残っていたので、全身洗ってさっぱりした。

泡を流し、肩までお湯に浸かる。思わず「ふーっ」と声が出た。いい湯加減だ。適度に疲れた身体に、心地好いぬくもりが染み入る。

自分のために労働し、働いた自分をめいっばい労る。なんとという贅沢。

これで美味しい料理があれば言うことなしなのだが、あいにく今夜も黒パンとリンゴだ。野菜もちよつとは買ってあるし、簡単な料理なら作れるが、自給自足が確立できるまでは、なるべく節約したい。

明日天気良かったら、朝からシーツを洗って、森に入ってみよう。

そして、次の日。

目覚めて窓の外を見遣ると、畑に小さな芽が並んでいた。

予想外の出来事に、思わずおおっ！と感嘆の声をあげる。

すぐに着替えて畑に飛び出した。

「これがスキルの効果か。すごいな」

まさか昨日の今日で芽を出すとは。

太陽の下、畝ごとに緑の葉がきちんと整列している様子は、なんとも愛らしかった。

「すすく育てよー」

湖から汲んできた水を撒きながら、思わずにやけてしまう。

長年の夢だったとはいえ、知識もない自分に自給自足などできるのかと心配したが、どうやらやっていけそうだ。ありがとう、『野菜すすくスキル（仮）』。野菜たちが実を付ける日が楽しみである。

水をやり終えると、勇気を出して井戸に向かった。試しにポンプを押してみる。幸い錆

びついてはいなかった。

最初は空振り続きだったが、急に手応えがあつて、真っ黒い水が出てきた。

「うわ」

一瞬めげそうになつたが、根気強く繰り返していると、次第に水が澄んできた。どうやら使えそうだ。

さつそくたらいと石けんをもつてきて、シーツを洗う。ついでに教会にあつた服も洗濯した。新しい着替えを手に入れるまで、ちよつと拝借させてもらおう。

森から手頃な木を伐つてきて、日当たりのいい場所に二本立て、その間にロープを張つた。

硬く絞つたシーツや服を干す。作業中も、水色や緑の粒子がきらきらとひっきりなしにまわりつた。

真っ白い布が風に翻るのを見上げる。なんとなく達成感がこみ上げて、額の汗を拭つた。

一旦教会に戻つて残り少ないパンを食べ、昼過ぎから森に入つてみた。

迷わないよう、鉋で木に目印を付けながら、茂つた木々の間を進む。

キノコは怖いので、果物を中心に探した。二時間ほどで運良く木イチゴと山ぶどうを見

つけたので、摘んで帰る。

その後、教会を隅々まで調べて、修繕する箇所をリストアップした。けっこうな数になつた。作業に取りかかるのは明日にしよう。とりあえず、詳しい間取りは把握できた。一階に礼拝堂、居間、台所、風呂場、倉庫、書庫に、部屋が四つ。二階には部屋が三つと、さらに屋根裏部屋がある。かなり広い。ベッドも結構な数があるし、風呂場も広いし、もしかすると旅人の休憩所のような役割も担つていたのかもしれない。

この教会で旅の疲れを癒やした人々に思いを馳せながら、森で採ってきた果物を食べ、風呂に入る。

その夜、おれは礼拝堂の奥の部屋、書庫にあつた本で、魔術の基礎を知つた。

どうやらおれが見ている光の粒は、精霊らしい。普通は見えないようだ。そして魔術は、これら精霊に、人間が己の体内に巡る魔力を捧げることで発動することのこと。

その原理は、まず呪文によって精霊と交渉し、捧げる魔力の量と質、つまり報酬によって契約が成立するか否かが決まり、ようやく発動するという流れになっているらしい。会社の取引みたいだな。

つまり、本来なら煩雑な手順が必要などころを、おれはそのすべての過程をすつ飛ばして、直接精霊に干渉できるといふことだ。……なんだろ、あらゆる権限を行使できる会長

みたいなものかな。

本来は細かな魔術ほど徹底してイメージを練り、制御する必要があるため、魔術が高度になるほど、呪文も複雑になっていくようだ。派手な魔術より、繊細な魔術のほうが難しい……だからおれが呪文も唱えず子猫を助けたとき、みんなあんなに驚いてたんだな。

試しに、顔の横に漂っている、赤い粒子に触れてみる。たったそれだけで、イメージした通り、指先にぼっと小さな火が灯った。

「うーん……」

魔術士同盟の研究に加わってくれというオファーも納得できる。煩雑な契約なしに魔術を使えるという、これは、この世界の人々が長年かけて積み上げてきた魔術の歴史、その根本を覆す、とんでもない能力だ。

額に冷たい汗が浮かぶ。

……これ、絶対にバレちゃだめなやつだ。誰かに知られたら、おれの平穏な生活が一瞬でパーになるやつだ。

おれは、魔術を使うところは絶対に誰にも見せるまいと、改めて固く誓ったのだった。

教会で三度目の眠りについた、その夜。

心地好い夢の中にいたはずのおれは、ふっと目を覚ました。

外はまだ暗い。

なんでこんな時間に目が覚めたのだろう。

不思議に思っていると、控えめなノックの音が聞こえた。

遠く、か細い声がする。

「すみません、どなたか……どなたか、いらつしやいませんか……？」

若い女性の声だ。女の子と喋っていいかもしれない。

おれはベッドから降りると、燭台に火を入れた。

部屋を出ると、礼拝堂を抜け、扉を開く。

そこには、四人の少女が立っていた。

一人は、十五、六歳くらいの、栗色の髪をした少女。その腕には、金髪の子が抱かれています。その隣では、ほっそりした銀髪の少女が、まだ小学校低学年くらいの赤髪の子の肩を支えるようにして立っていた。

彼女たちの服は焼け焦げ、煤で汚れた顔は、一目で分かるほどに疲弊しきっていた。

栗色の髪をした少女が、緊張した面持ちで口を開く。

「あの、夜分にすみません、私たち……」

「入って」

扉を支え、四人を台所兼食堂に通した。

「あ、あの……」

「そこに座って、ちょっと待っていて」

戸惑っている四人に椅子をすすめ、水を張った鍋を火にかける。ヴィラリアで買った野菜を切って入れ、台所にあった岩塩を削り入れ、簡単なスープを作った。

台所に、ことごとと温かい音が響く。

よほど疲弊していたのか、金髪の子は栗色の髪の少女の膝に座ったまま寝息を立て、赤髪の少女は船をこいでいた。銀髪の少女が、その様子を心配そうに見つめている。

「あ、ありがとうございます」

器をテーブルに置くと、栗色の髪の少女が深々と頭を下げた。ひとさじすくって、眠そうにしている赤毛の女の子に食べさせる。

「！」

宝石のような瞳が、パッと輝く。そのまま自分で匙を持つと、せわしなく食べ始めた。

「アシユリー、ちゃんとふーふーして。一気にほおばってはだめよ？」

アシユリーと呼ばれた女の子は、食べるのに夢中だが、そんな中にもどことなく上品さが見えてとれる。

栗色の髪の少女と銀髪の少女もスープを一口含んで、ほっと息を吐く。

彼女たちの緊張が緩んだところを見計らって、優しく尋ねた。

「それで、どうしたんだ？」

この夜更けに、うち捨てられた森の教会に女の子が四人訪れた、それもぼろぼろな格好で。ただごとでないことはすぐに分かる。

少女はぐっと息を詰まらせ、それから目を上げた。

はしばみ色の瞳が揺れながら、まっすぐにおれを見つめる。

「このような夜分に、突然のご無礼をお許しください。私は、王立ユリス学園のシスターをしておりました、ステラと申します」

「ユリス学園？」

「ここから山を二つ越えた先にある、冒険者を育成するための学園です」

そんな学園があるのか。

おれの（不完全な）知識によると、冒険者っていうのは、ギルドに登録してなるものだ

が……なるほど、こんな幼少期から通う、専門の育成機関もあるのか。エリート学校みたいなものかな。

ステラと名乗った少女は、膝で寝ている金髪の少女を撫でた。

「この子たちは、そこに通う学生だったのです。全寮制の学校で、多くの子どもたちと勉強をしながら暮らしていたのですが……三日前、学園が火竜に襲われて、焼け出されてしまつて……」

火竜。

「脳裏に、見たこともない、巨大なドラゴンの姿が翻る。

冒険者専門の育成機関となれば、当然教師たちも凄腕ぞろいだったろう。その教師たちですら、退けることが敵わない相手……魔物の知識があまりないおれでも、相当ヤバイ敵だろうことは分かる。

「三日間、森をさまよつてたのか？」

ステラはうなずいた。

その煤で汚れた顔を見つめる。下の子たちは、五歳か六歳か、あんな小さな子どもを連れて、命からがら逃げてきたのだ。うっそうと茂った森の中、獣や魔物に襲われずここにたどり着けたのは、奇跡という他ないだろう。

「もし迷惑じゃなければ、親御さんのもとに送り届けるよ」

四人は疲れ切つて、怯えている。一刻も早く安全な場所です、安心して休んでほしい。

そんな想いで提案したけれど、ステラは痛まじげな表情で俯いた。

「この子たちには、身寄りがないのです」

小さな囁きは、頼りなげに震えていた。

その時、怖い夢でも見たのか、金髪の子がぐずりはじめた。

「ふえ、え」

「フィオ、大丈夫、大丈夫よ」

赤髪の子はその様子を心配そうに見守り、銀髪の少女は硬い表情で俯いていた。

その姿を見ながら、おれは彼女たちの身の上に想いを馳せた。

身寄りはなく、寝食を共にした友達と離ればなれになり、頼りにできる大人たちとはぐれて、帰る場所もなく……

ステラはしばし迷っていたが、やがて顔を上げた。

「神父様、お願いがあるのです。学園が復興するまで……いえ、生活の目処がつくまでの間、この子たちを預かっていただけませんか？ 不躰なお願いとは重々承知です、けれど他に頼れる人もいなくて……」

縋るような声に、けれどおれは首を横に振るしかなかった。

「残念だけど、おれは神父じゃないんだ」

「え？」

「二日前からたまたまここに棲み着いただけの、ただのしがない旅人で」

「……そう、ですか……」

ステラが肩を落とす。

俯いている彼女に、おれは笑いかけた。

「でも、もしそれでも良かったら、しばらくここで一緒に住まないか？」

「！」

放っておけるわけがなかった。

おれだって、勝手に間借りしている身だ。神父なんてたいそうな身分でもない。けれど、たとえ一時でも、彼女たちの安心できる場所になれるのなら嬉しいと思っただけ、面目躍如だろう。

ステラが声を詰まらせる。大きな瞳に涙が盛り上がった。

「ああ、ありがとうございます！ このご恩は一生忘れません！ 近いうちに、必ずやこの子たちを迎えにまいります……！！」

「ステラはどうするんだ？」

「私は、どこか近くの街で働こうと思っております。必ず月に一度は仕送りをさせていただきますので……」

それまで黙っていた銀髪の少女が、硬い表情で口を開いた。

「だめだよステラ、ほくも一緒に行く」

「いいえ、ノア。あなたはこの子たちについてあげて。この方をお手伝いするのよ」
たぶん、ステラも頼れる身寄りがいないのだ。しっかりしているように見えるが、まだ十五、六歳。そんな少女が、一人で働いて、子どもたちの生活費を稼ぐつもりである。その決意に満ちた顔を見れば、いったいどんな仕事に就くつもりなのか、容易く想像できて。

「あー」

おれは頬を掻いた。

「その、良かったら、ステラも一緒に住まないか？ ステラが居たほうが、この子たちも心強いだろうし」

「！ よ、よろしいのですか？」

「ああ」

もちろん、最初からそのつもりだった。

「部屋もベッドも余ってるし。ちょうど、自給自足生活に挑戦しようと思ってたところで……いろいろと手伝ってもらうことになるかもしれないけど」

「は、はい、はい、それはもう、もちろんです……！ ああ、神さま……！」

ステラは胸元で十字を切ると、涙を拭いた。三人の子どもを守り導きながら、ずっと不安を堪えていたのだろう。細い肩が震えていた。

「あの、お名前をうかがってもよろしいでしょうか？」

「大成……」

つい前の世界での名前が口を突きかけて、言い直す。

「ケント。おれは、ケント・オーナリーだ」

「ケントさん。どうぞ、よろしくお願いいたします。改めまして、私はステラと申します。ステラ・ジルベールです」

「よろしく、ステラ」

ステラは微笑むと、スリーブを平らげて眠たそうにしている赤髪の子を撫でた。

「この子はアシュリー・ティルケ。八歳。魔術士志望です。そして、この子は——」

「ノア」

銀髪の少女は、凜とした声で言った。

「ノア・ルクレツィア。剣士志望。十二歳」

「よろしく、ノア」

ステラは膝の上ですやすやと寝息を立てている金髪の子を見て、愛おしげに目を細める。

「そしてフィオ・ミアムズ。一番年下の、五歳です。この子は召喚士を目指しています」

「おれは頷いて立ち上がった。」

「詳しいことは、また明日。とりあえず、今日はよく眠って。明日の朝、風呂を沸かしておくから」

「いえ、そこまでしていただくわけには……」

慌てるステラを遮る。

「みんな、よくがんばったよ。ここではもう、がんばらなくていいから。ゆっくり休むことだけ考えて」

ステラは声を詰まらせて、深々と頭を下げた。

おれは、安心したのか、すっかり眠りこけてしまっている赤髪の女の子——アシュリーを抱き上げた。

「うわ」

その柔らかさに驚く。

子どもってこんなぐにやぐにやしてるもんなの!? 体温も高くて、なんだか別の生き物みたいだ。

不安に思いながら、廊下を歩く。部屋はいくらでもあるから、一人一室でもいいが、四人一組のほうが安心だろう。

四人部屋のベッドに寝かせ、ステラに燭台を預けた。

「部屋は好きに使って。たんすにある服も使ってい……と、思う」

おれの所有物ではないが、建物も備品も、このまま朽ちていく運命にあったのだ。有効活用したほうが浮かばれるというものだろう。

「ありがとうございます」

「それじゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい、ケントさん」

ステラが微笑む。はしほみ色の瞳が潤んでいた。

おれは部屋を出ると、そっと扉を閉めた。

次の日。

おれはいつもより少しだけ早く起きた。

四人部屋の扉を開き、そっと覗く。みんなぐっすり眠っているようだ。ちゃんと休めているようで安心した。

音を立てないよう気を付けながら、外に出る。

たった一人で送るはずだったスローライフ、思いがけず女の子たちを保護することになったけれど、自分に課した掟は変わらない。魔術はあくまで対魔物用。余計な面倒ごとに巻き込まないために、あの子たちにも、魔術を使うところは見せないでおこう。

教会の横に回り、畑の様子を見に行く。

「おー」

野菜はだいぶ生長していた。この調子だと、あと十日もすれば実が付きそうだ。収穫する時を想像して、今からわくわくしてしまう。ありがとう、「野菜すくすくスキル
(仮)」。

「大きく育てよう」

せつせと井戸から水を汲んできては遣る。
雪に濡れた葉や苗を満足して眺めていると、森からがさりと音がした。

「!」

繁みに、赤い目がいくつも光っていた。

魔物だ。そう認識するよりも早く、手が剣の柄に滑っていた。

おれが身構えると同時、黒い炎に包まれた狼の群れが繁みから飛び出した。

『ガアアアアア!』

先頭の一匹が、牙を削いて躍り掛かってくる。腰を据え、その鼻面を真一文字に斬り払った。

『ギャン!』

次いで右手から迫ってきた別の個体の腹部を貫く。虹色に輝く核が、ガランと地面に落ちた。

『グルルルル……』

狼たちは警戒しながらも、退く気配はない。その数およそ二十頭。一匹ずつ相手していたのではキリがない。

頭の中でイメージを練り上げるが早いか、指を鳴らす。

周囲の石が浮き上がり、狼たちにつぶてとなつて降り注いだ。

『ギヤウ!』

急所を貫かれた狼たちが、次々と消滅していく。

仕留めきれなかった残党に、剣でとどめを刺した。

「ふう」

烟を踏み荒らされなくて良かった。早めに柵を作る必要がありそうだな。

額の汗を拭いながら、剣を収めた、瞬間――

「わー、すごいーい!」

「!?!」

振り返る。

教会の窓から、四つの顔が覗いていた。

「あ」

み、見られた……!!? 出会った翌日に――魔術は見せるまいと誓ったばかりなのに、見られちゃった!?

少女たちは啞然とし、あるいは目を輝かせている。

どうしよう、どう誤魔化せばいい!?

うろたえている内に、赤髪の子——アシユリーが裸足のまま、窓からびよーんと飛び出した。

「あつ、アシユリー！」

ステラの制止も聞かず、畑を迂回して全力で走ってくる。その勢いたるや、さながら飼い主を見つけた子犬だ。

慌てて広げた両腕の間に、柔らかな身体が全力で飛び込んできた。

「うおっ！」

「わあ、すごい、すごい！ かっこいいっ！ ねえ、もういつかいいみせてーっ！」

あどけない顔に、きらきら眩い笑みが弾ける。

「あ、ああ……！」

あまりに純粹無垢な笑顔を前に、おれは言い逃れることもできず、頬を掻いた。その日から、おれと少女たちとの、不思議な疑似家族生活が始まったのだった。

第四章 生活の基盤を作ろう！ & 娘たちと仲良くなるろう！

少女たちに早くも魔術を見られてしまつてから、一時間後。

台所でスープを作っていると、ステラたちが入ってきた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

改めて挨拶する。

一人暮らしが長かつたから、ちよつと照れくさい。

「お風呂、ありがとうございます」

ステラが頭を下げる。その髪が少し濡れている。

湯に浸かり、教会にあった服に着替えてさっぱりしたのか、四人の表情は晴れやかだつた。……昨夜はそれどころじゃなかったけれど、改めて見ると可愛い子ぞろいだな。なんだか緊張する。

自然体でいいんだ、とりあえず落ち着こう。

水を飲んでいると、アシユリーがトトツと駆け寄ってきた。ルビーみたいに輝く瞳が、おれを見上げる。

「パパ、おはようございます！」

「ぶっ！」

水がまともに気管に入って、むせる。

「げほ、げほっ……ば、パパ……？」

アシユリーはリボンのついた頭をこてんと傾げた。

「ステラにきいたよ。これから、いつしよにすむんでしょ？」

「ああ」

「せんせいでも、しんぶさんでもないんでしょ？」

「ああ」

するとアシユリーは嬉しそうに飛び跳ねた。

「じゃあ、パパだ！ あしゅり、知ってるよ！ いつしよに住むおとこの人のこと、パパっていの！」

おれは思わずステラと顔を見合わせ、笑った。

アシユリーたちには、両親がいないと聞いた。短い間だけど、この子たちの生活を預か

るわけだし……それでこの子が安心できるなら、それでもいいか。

と、ステラの背後に、柔らかな金髪が見え隠れしているのに気付いた。

ええと、名前はたしか……

「おはよう、フィオ」

「！」

声を掛けると、フィオはステラの服の裾を握って、ますます引っ込んでしまった。人見知りしているらしい。無理もない、昨日は寝ていたから、初対面だもんな。

「フィオ、ご挨拶するのよ」

ステラが背中を押すけれど、フィオはますますむずかかって、ステラのスカートに潜り込んでしまった。

「あつ、ふい、フィオっ……！」

ステラが真っ赤になって慌てている。これじゃあステラも困るだろう。

おれはしゃがみ込むと、口笛で鳥の鳴き真似をした。数少ない特技のひとつだ。

フィオがスカートから顔を出す。きよろきよろと鳥の姿を探す内、おれと目が合った。

「初めまして、ケントだ」

「……………」
翡翠色の瞳が頼りなげにさまよう。白い肌は陶器のようで、ふわふわとくせのある猫っ毛は金色に輝いて、まるで人形みたいだ。

やがて、「フィオ……」と鈴のような声で自己紹介してくれた。

「よろしくな、フィオ」

ちよっとだけ打ち解けたところで、食卓を囲む。

朝食は野菜スープとリンゴだ。

「いただきます！」

しばらくちゃんとしたものを食べていなかったのだろう、アシユリーたちは嬉しそうに食べ始めた。そんな中で、フィオは食が進まないようだった。ちよっと心配だ。

と、アシユリーがスプーンを握りながら興奮気味に目を輝かせた。

「パパ、魔術おしえて！」

そういえば、この子は魔術士志望なんだっけ。

でも、おれに教えられることなんてあるのだろうか？ 魔術の原理はよく分からないまままだし……

「さっきのパパ、かっこよかった！ あしゆりもパパみたいにカッコよくなりたい！」

「そ、そうか」

こんな羨望のまなざしを向けられることも初めてなら、かっこいいなんて言われたのも初めてで、なんだか照れてしまう。

「鼻の下伸びてる」

ノアにほそりと指摘されて、おれは慌てて頬を引き締めた。

アシユリーの口元を拭きながら、ステラが口を開く。

「それにしても、無詠唱で魔術を使われるなんて……すごい御方だったのですね」

「呪文なしで魔術を使えるのって、やっぱり珍しいのか？」

「ええ。私を知る限りでは、過去にただ一人……伝説の大賢人さまでだけです」

そういえば、ヴィラリアから逃げる時も、誰かが大賢人の再来だとか叫んでたな。

「その大賢人って、何なんだ？」

「百年前、魔王との決戦において、勇者さまを支え導いた、賢者リユカさまのことです。

ご存じありませんか？」

「あー、うん。ちよっと、そういうの疎くて……」

ステラとノアが目を見かわす。

まずい。どうやらこの世界の人間なら当然知っている話のようだ。やっぱりおれの知識

にはムラがある。

ステラはちよつと迷っていたようだが、慎重に切り出した。

「あの、あなたほどの御方が、人里離れた教会で暮らしているのには、何か理由が……?」

「あー……ちよつと、前にいろいろあつて。人に疲れたつていうか、昔からスローライフに慣れててさ。だから、おれが魔術を使うことは、黙つててくれないか?」

正直に伝えると、ステラはおれの意図を汲んでくれたようだった。

「ええ」

はしばみ色の瞳が、柔らかくまたいた。

——まるで、すべてを許してくれるような、抱擁するような、優しい微笑み。こんなまなざしを向けられたのは、何年ぶりだろうか。

朝食を終えると、ステラたちに一通り設備の説明をして、作業に掛かる。

まずは教会の修繕だ。これまではおれ一人だから後回しにしていたが、少女たちも暮ら

すとなるとそうもいかない。

倉庫から大工道具を取つて、外に出た。

教会の側面に空いた穴の前にしゃがみこんで、周辺の朽ちた壁を剥がしていく。

作業をするおれに、アシユリーがまとわりついた。

「ねえ、パパ。魔術は? つかわないの?」

「魔術は魔物相手にしか使わないって決めてるんだ」

「ふーん。パパのかっこいい魔術、またみたいなあ」

純粹な目で見つめられると、嬉しいやら照れるやらでむずがゆくなつてしまう。

と、たらいを持ったステラが裏庭から手招きした。

「アシユリー、フィオ、お洗濯しますよー」

「はーい!」

教会にあつたシーツや衣類をかき集めて、洗濯してくれるらしい。

裏庭から響いてくる楽しそうな声に耳を傾けながら、作業を進める。身体能力も前世より優れているようで、作業は面白いくらいすすい進んだ。

と、背後から涼やかな声があった。

「こつちも剥がせばいい?」

「ああ。手伝ってくれるのか？」

ノアは無言で頷くと、隣で壁を剥がしに掛かった。

その横顔をちらりと見やる。十二歳と聞いたが、もつとおとなびて見える。整った顔立ちのせいだろうか。背筋は凜と伸びていて、所作は洗練されて無駄がなかった。細い銀髪が太陽の光を弾いて、清らかに光る。

「次は？」

アイスブルーの瞳に見つめられて、我に返った。

ノアを連れ、ノコギリを携えて森に入る。

おれが伐り出した木材を、ノアは黙々と運んだ。

「おー、ノア、根性あるな」

「別に、これくらい普通だし」

ノアは照れくさそうに口を結んで、木材を抱え直す。

重そうではあるものの、ぐらつきはない。体幹がしっかりしている証拠だ。剣士志望なだけあって、身体を鍛えているらしい。

木材を削り、やすりを掛けて、壁に打ち付けていく。

ノアの助けもあって、修繕は思ったより早く終わった。

「ありがとう、助かったよ。今度ペンキ買ってこなきゃな」

切り株に座って休んでいると、ノアがもじもじと口を開いた。

「あの……」

「ん？」

「剣……今朝の……」

「あー」

そうだ、一部始終見られたんだった。

ノアはしばらく言いよんでいたが、やがておれをまっすぐに見つめた。

「手合わせ、してほしいんだけど」

数十分後、おれたちは剣を手に向かい合っていた。

「はっ、はあっ……」

突っ立っているおれに対して、ノアは息を乱している。

「くっ……！！」

ノアは歯を食い縛り、一気に踏み込んできた。

繰り出される細身の剣を、後方にステップを踏みながら左右に弾く。

「なんでつ、動き、ゆつくりに見えるのにつ……ぜんぜん、歯が立たないっ……！」

ノアは悔しそうだった。

再び対峙すると、汗を拭い、アイスブルーのまなざしでキッとおれを射貫く。

「もしかして、手、抜いてる？」

「そういうわけじゃないんだけど」

そう答えるおれのほうが戸惑っていた。

なにしろ身体が勝手に動くので、力の入れようがない。ノアからしたら、どうしても『適当にあしらっている』ように見えてしまうのだろう。

ノアは剣を構え直した。

「もう一回！」

「今日はおしまい」

「なんで！」

「オーバーワーク、だめ、絶対。絶対。剣士は身体が資本なのに、無理してケガでもしたら元も子もないだろう？」

「……ん」

ノアはしばし逡巡していたが、やがて剣を収めた。

負けず嫌いだが、素直さも持ち合わせている。社畜時代の後輩よりよっぽど聞き分けが
いい。

「あの、ケント……さん」

「ケントでいいよ」

「あ、うん……ケント……。明日も、お願いしたいんだけど……」

「ああ、おれで良かったら」

ノアは嬉しそうに頬を緩めて、「うん」と頷いた。

おれも剣をしまいながら、ちよつと思案に暮れた。

……手合わせと言われたが、あれで良かったのだろうか？ たぶんノアは、おれから何らかの技術を得たはずで……でも、付け焼き刃のおれに教えられることってあるのか……？

と、教会の裏からきゃつきゃと楽しげな笑い声が響いてきた。

「アシユリー！　こら！　だめよ、そっちは……！」

ステラの声がしたかと思うと、裏手からアシユリーが飛び出してきた。

その姿は、生まれたままの、一糸まとわぬ——つまりは、すっぱんぽんで。

「!?」

「あつ、ご、ごめんなさい！ 洗濯をしていたら、水浴びを始めてしまつて……！」
慌てるステラもどこ吹く風、アシユリーはびしょ濡れのまま嬉しそうにおれに飛び付いた。

「みずあびきもちいーよ！ パパもいっしょに入ろーっ！」

「ちよ、いや、あのっ……!?!」

わあああああナニコレどうしたらいいの!?! 日本だったら即逮捕案件なんですけど!?!
それとも変に意識するほうがおかしいか?!

裸の幼女に抱きつかれるという初めての事態に、青くなればいいのか赤くなればいいのか分からない。

はっと気付くと、ノアがうるんげな目でおれを見ていた。

ちよっと引き気味に口を開くことには、

「……ロリコン？」

「ち、違う！ 違うから！」

家族生活初日から降って湧いたロリコン疑惑を、おれは死に物狂いで否定したのだった。



お昼に、ステラがごはんを作ってくれた。
黒パンに野菜煮込み、デザートはリンゴと森の果実だ。

「お口に合うといいのですが……」

優しい味が胃に染み渡る。手作りの味だ。人が作ってくれた手料理なんて食べたの、何年ぶりだろう。不覚にも、ちよつと目の奥が熱くなってしまった。

「すごくおいしいよ、ありがとう」

ステラは嬉しそうに笑った。

「おいしー!!」

アシユリーは相変わらずいい食べっぷりだ。見ているこちらまで元気になる。

と、フィオがスプーンを置いた。器にはまだ半分以上残っている。

「フィオ、もう食べないのか?」

じつと俯いているフィオの頭を、ステラが心配そうに撫でた。

「フィオは、もともと食が細くて……というよりも、食べ物に対する興味が薄いみたい

で」

「リンゴ、おいしいぞ?」

きれいに八等分されたリンゴを差し出すが、フィオは小さく首を振った。

うーん、子どもはみんなリンゴが好きなんだと思ってたが……

おれはふと思いついて立ち上がると、包丁を手を取った。

皮をちよつと細工して、差し出す。

「ほら」

「!!」

うさぎ形のリンゴを見たおとたん、フィオが身を乗り出した。小さな手にうさぎリンゴを持って、じつと見つめている。

おれは思わず苦笑した。

「逆効果だったかな?」

と、リンゴと熱心に見つめ合うフィオに、ノアが隣からささやく。

「フィオ。うさぎさんが、『食べて〜』って言うてるよ。ほら。『フィオちゃん、ほくを食べて〜。フィオちゃんに食べてもらえたら、ほく、嬉しいなあ?』」

「……………」

フィオは、ノアのアテレコに誘われるようにして、うさぎのおしりをおそるおそるかじつた。その目がぱつと輝く。

「良かった。やっぱりおながが減っていたのですね」

ああ、と新たなリンゴをうさぎ形にしながら、ノアを見遣る。面倒見いいんだな。

ノアはおれの視線に気付くと、赤らんだ顔をぶいと背けた。

……もしかして、ロリコン疑惑、まだ晴れてないのかな？

昼食を食べ終わってくつろいでいると、アシユリーが膝によじ登ってきた。

その頭を撫でながら、思案に暮れる。

午後は畑の柵作りに充てるとして、明日は何をしようか。

一人考えていると、ステラが言いづらそうに切り出した。

「ところでケントさん、もうすぐ食料がなくなってしまうようなのですが……」

「あ」

そうだった。野菜が育つまでと悠長に構えていたが、おれ一人ならまだしも、彼女たちを飢えさせるわけにはいかない。いくら便利なスキルがあるとはいえ、野菜を収穫できるようにするには、まだ一週間ほど掛かりそうだ。

異世界滞在四日目。

おれは、近くの街に降りる決心をしたのだった。

第五章 食料を買おう&アシユリー覚醒

次の日、おれは朝食を終えると、食堂で出かける準備を整えた。すかさずアシユリーがすつとんでくる。

「パパ、どこに行くの？」

「ふもとの街まで降りて、買い物をしてくるよ」

「！ あしゆりもいく！」

「アシユリー、ケントさんは忙しいのよ。いい子で待ってましようね」

なんとか論そうとするステラに、おれは笑った。

「いいよ、おれも一人じゃ不安だし。アシユリー、一緒に行こう」

アシユリーは顔いっぱいに歓びを咲かせると、食堂を飛び出した。

「じゅんびしてくるーっ！」

数分後、アシユリーはばんばんに膨らんだりリュックをしょって戻ってきた。

「じゅんびできたーっ！」

「おー、張り切ってるなあ」

重たそうなリュックの中から、スコップやら植木鉢やら虫取り網やらを取り出して、必要最小限にしてやる。

「いいことアシユリー、わがまま言わないのよ？ 時々お水を飲むのを忘れないでね。もしケントさんとはぐれたら、周りの人に迷子札を見せるのよ」

ステラは心配そうだ。まるで本当の姉妹みたいだ。

「じゃあ、行ってきます」

「いつてきまーす！」

ステラとノア、フィオに見送られ、元気いっぱいのアシユリーを連れて、丘のふもとにある街へと向かう。

ステラは気を揉んでいたが、アシユリーはおれの傍から離れず、長時間の歩行にも弱音を吐かず、時々花の蜜を吸ったり小鳥と一緒に唄ったりして、むしろずいぶん助けられた。一人だったら退屈していたところだ。

森を抜け、ひとけのない街道を歩くこと一時間。

壁に丸く囲まれた街に着いた。

街の名は、アマン。人口は三万人。ヴァラリシアに比べて規模は小さいが、通りは活気

に満ちている。

門をくぐると、さまざまな商品を並べた露店が出迎えた。皿、衣服、香料。武器に本、家具まで。大抵のものは揃いそう。

「わあー」

アシユリーは物珍しそうに目を丸くして、きよろきよろしている。アシユリーたちの通っていた学園は、全寮制だったそうだから、街に来ることもあまりなかったのだろう。

通行人にぶつからないよう小さな手を引いて、ゆつくりと大通りを歩く。腰に提げた袋の中で、魔物の核がじゃらりと音を立てた。

「まずは換金しなきゃな」

煉瓦造りの立派な建物の前に立つ。スローライフを始めて早々、まさかギルドの門をくぐることになるとは思わなかった。

ちよつと緊張する。

何百人、何千人という冒険者が握ったであろう古びた取っ手に手を掛けると、重たい扉を引いた。

賑やかな喧噪が溢れ出す。

「ここがギルドか……」

中では、冒険者パーティーが情報交換をしたり、掲示板の前でクエストを吟味したりしていた。併設された食堂では、昼間から酒を飲んでいる冒険者もいる。アシユリーを連れてきたのは失敗だったかな？

アシユリーを安心させようと、小さな手を握り直した。

窓口がいくつか並んでいる。

そのうちのひとつ、一番奥の窓口に足を向けた。

迎えたのはメガネをかけた若い女性だ。『シャルロツテ』と書かれた名札を付けている。「ようこそ、アマンのギルドへ。本日は何のご用でしょうか？」

「あの、魔物の核を……」

「換金ですね。こちらの書類にサインをお願いします」

女性は慣れた様子で書類を差し出し「おれの横に立っているアシユリーに気付き、ガタターン！ と椅子を蹴って立ち上がる。

「幼女!!!」

「!？」

その勢いに、思わずアシユリーをかばって後退った。

や、やっぱりギルドに子どもを連れてくるのはマズかったか!?

濡れ光るまなざしからアシユリーをかばうと、シャルロットはハッと我に返った。椅子に座り、メガネを上げる。

「失礼いたしました。こちらの書類にご記入をお願いします」

さっきまでの興奮ぶりが嘘のように、てきぱきと指示する。

どうやら核の換金だけなら、冒険者としての登録や手続きは必要ないらしい。特に身分を聞かれることもなく、あっさりと換金できた。

ほっと胸をなで下ろす。万が一、元異世界人だとバレたら厄介なことになると心配していたが、杞憂だったな。

手元に来たのは金貨三枚。思っていたより多くて良かった。

「よし、これで食料を買おうぞ」

「おー！」

人波に乗って、街の南、商店街へと赴いた。

野菜と果物を中心に見て回る。なにせ育ち盛りの子どもたちがいるのだ。栄養バランスを考えて、あれこれ買い込む。どの食材も新鮮で、種類も多い。見ているだけで楽しかった。

アシユリーを連れて歩いていると、若くはつらつとした女性の声呼び止めた。

「おにーさん、ちょっと寄ってかないかい？ ジェシカの肉屋、いい肉入ってるよう！」

目を向けると、テントの天井からいろいろな種類の肉がぶら下がっていた。

「おー」

そういえば、肉なんて何日も食べてないな。タンパク質は大事だ。

「じゃあ、こっちの塩漬け肉と、燻製と……」

保存がききそうなものをいくつか注文する。

「あしゆりがはらう！」

「ん」

金貨を預けると、アシユリーは背伸びをして、ジェシカに手渡した。

それを受け取りながら、ジェシカがにかりと白い歯を見せる。

「おや、お嬢ちゃん。パパとデートかい？」

「！」

アシユリーは目を輝かせると、ちよつと口を尖らせておすまじしてみせた。

「そうよ、あしゆりね、きょうはデートなの」

ませた口調が可愛くて、ジェシカと一緒に嘖き出す。

「はいよ、おまけでソーセージつけといたからね！ また来ておくれ！」

「ありがとうございます」

店を出て、アシユリーと手を繋いで歩く。アシユリーはさつきまで元気いっぱいだったのに、なんだか顔を赤らめて、ちょこちょこ小股で歩いている。

「どうした、疲れたか？」

「んーん。なんでもないのよ」

どうやらデートモードだ。小股なのは、爪先で背伸びをしているせいらしい。

……可愛いな、と生まれて初めて胸にわき起こる感慨を噛み締める。いや、決してロリコンではないのだが、なんかこう、保護欲をくすぐられるというか、守りたくなるというか……え、可愛いな……娘がいたらこんな感じのかな。

賑やかな呼び込みの声が行き交う中、他にも食料や調味料、茶葉を買い込んだ。

と、アシユリーが「あつ！」と声を上げて、露店のひとつに駆け寄った。

アクセサリーやぬいぐるみが見つかりと並んでいる。万屋といったところか。

「ねえパパ、これほしい！ これと、これ！ あと、これも！」

「全部はむずかしいなあ」

「むずかしいの？」

「そう。どれかひとつにしような」

「んー」

目の前に並べたネックレスに、ドクロの置物、うさぎのぬいぐるみを、アシユリーは真剣な顔で見比べている。

「アシユリーはそういうのが好きなのか？」

「ううん、これねー、ステラに。いつもありがとって。こっちはノア。これはフィオだよ」

それで迷っていたのか。そういうことなら仕方ない。

家族のために悩む姿を前にしては、頬も財布の紐も緩むというものだ。

「これ、全部ください」

「！ ありがと、パパ！」

アシユリーはびよんびよんと飛び跳ねた。

新たに野菜の種や苗、パンも買う。

大体の物は揃ったので、アマンの街を散策する。のどかでいい街だ。アシユリーは、広場で見かけた大道芸がいたくお気に召したらしい。

「あしゆり、おおきくなったらライオンさんになる！」

「かっこいいな」

「パパは？ おおきくなったら何になる？」

「何になろうかな。何がいいと思う？」

「うーん……ヤシの木！」

「それは大きいなあ」

大地に根を張り、太陽をめいっばい浴びながら、風に揺られる一生か……悪くない。ヤシの生涯に想いを馳せていると、アシユリーがおれの手を引いて走り出した。

「わっ、アシユリー!？」

「パパ、こっち！ 水のおいがする！」

「に、におい？」

着いたのは公園だった。

たくさんの方が思い思いにくつろぐ中、噴水がきらきらと水を噴き上げている。

「わー！ パパ、水あびしよう！」

「ちょ、待っ!? アシユリー、だめ、脱がないで！」

服を脱ごうとするアシユリーを必死に止める。この子なんですすぐ脱ぎたがるの!?

周囲の人々が何事かと注目する。違うんです、ロリコンじゃないんです!

必死にアシユリーの服を掴んでいると、凜とした声が掛かった。

「きみ」

顔を上げる。馬に跨がった黒服の女性が、おれたちを見下ろしていた。

あっ、これたぶん警察的な人！ 下手するとしょっぴかれるやつ！

「あっ、いや、違っ……!! この子は娘のようなもので、邪な意図はまったくなく……っ!!」

しかし、しどろもどろに言い訳するおれとは裏腹に、黒服の女性は泰然と頷いた。

「ああ、子どもはすぐに脱ぎたがるものだからな」

そうなの!? 女の子も!? 女の子もそうなの!? 子ども怖い!

アシユリーが全裸になろうとするのをやめて、スカートの裾をつまんだ。おすましスイツチが入ったらしい。

「こんにちは、きけいたいさま。あしゆり、パパとデートなのよ」

「そうか。今日は最高のデート日和だからな。ですが、どうぞ風邪を召さないようお気を付けてください、レディ？」

気障なほほえみが、グツとくるほど様になっている。この女性、下手な紳士より紳士だぞ。

女性はひらりと馬から下りた。艶やかな黒髪が風になびく。

「申し遅れた、私はアマン騎警隊の副隊長、スイレンという」

濃紺の瞳が、おれを抱えている大量の荷物にちらりと向けられた。

「急に声を掛けてすまない。あまり見ない顔だと思つてな。かといって、旅人ではないよ
うだが……」

この荷物を見ればそうなるか。どうやらこの街の警察は優秀らしい。

「初めまして、ケント・オーナリーです。自給自足に憧れて、最近、丘の上の教会に引つ越してきたんですけど、どうしても食料が足りなくて、買い出しに」

「そうか。よろしく、ケントくん」

「ケントです」

「ここはいい街だろう」

スイレンはふわりと笑うと、濃紺の瞳で、公園でくつろぐ人々を見渡した。

「自然は豊かだし、商業も栄えている。人々は温厚で犯罪も少ない。これ以上に住みよい

街はないよ」

「魔物に襲われることはないんですか?」

この世界に来てからずっと気になっていたのだ。

ダンジョンに巣くう魔物は冒険者が向いて討伐するとして、街を襲う魔物に対しては誰がどう対処しているのだろう。

「アマンは小さいが、優秀な騎警隊員が揃っているからな。ワイバーンでもこないかぎり」

まるでその言葉を遮るようにして、耳障りな雄叫びが空気を揺るがした。

『ギエエエエエエエー!』

空を見上げる。馬車ほどもある竜が、上空を舞っていた。

スイレンが声を上げる。

「ワイバーン!」

えええええええ!? 言ったそばからワイバーン来ちゃった! 噂をすれば影的な!?

慌ててアシユリーを後ろに庇う。

悲鳴が渦巻く中、スイレンが細剣を抜き放った。

「さがれ!」

は虫類独特の細い瞳孔が、おれたちをとらえる。ワイバーンは大きく翼を打つなり、一直線に降下してきた。

「騎警隊副隊長の名にかけて、誰一人として傷付けさせはしない!」

迫る牙を、スイレンが正面から迎え撃つ。高い金属音が弾けて、ワイバーンが再び上空へ舞い上がった。

すかさずスイレンが馬の鞍から弓矢を取る。

上空に狙いを定めた瞬間、ワイバーンが羽ばたき、強風が吹き付けた。

「くっ……！」

スイレンがよろめく。

ワイバーンの両眼がこちらを見据えた。と思つた次の瞬間には、身をうねらせて降下してきた。

大きく開いた顎が迫る。

「パパ……！」

アシユリーが裾にしがみつく。

瞬間、おれはとつさに魔術を発動させていた。

噴水に向けて手のひらをかざす。水が生き物のように盛り上がる。大蛇と化した水流がワイバーンを呑み込み、地面に叩き付けた。

『ギギイツ……！』

一瞬動きの止まったワイバーンを、スイレンの剣が貫く。

『ギイエエエエエエエエエエ！』

胸の悪くなるような断末魔の声を残して、ワイバーンが黒い霞と化した。

固唾を呑んで見守っていた市民たちから、わつと歓声が湧く。

「スイレンさま、お見事！」

「アマンの守護神！ 騎警隊の誉れ！」

しかしスイレンは剣もしまわず立ち尽くしたまま、まっすぐにおれを見ていた。

「今のは……」

やべっ……！！

とつさに目を逸らすのが、スイレンは信じがたいとでも言いたげに口を開いた。

「魔術を、使ったのか……？ 無詠唱で？ ……大陸の南、ヴェイラリアに大賢人が現れたと聞いたが、君はもしか……？」

「い、いや、人違いで——」

「あのね、パパはすごいのに！ じゅもんをとなえないで魔術を——もがっ！」

おれはとつさにアシユリーの口を塞ぐと、大声を上げた。

「い、いやー、まさか噴水がワイバーンを押さえつけるなんて、びっくりしたなー！ アマンの噴水すごいなー！」

スイレンは底知れない目でじつとおれを見ていたが、やがて視線を緩めると、ひらりと馬に跨がった。

「ここで逢ったのも何かの縁だ、ミスター・コント」

「セントです」

「困ったことがあったら、遠慮なく言ってくれたまえ」

「ありがとうございます」

「それと、最近物売りを装った物騒な輩が出没しているらしい。くれぐれも気を付けたまえ。それでは、いい一日を」

スイレンは軽やかな笑みを浮かべると、馬を駆って去って行った。

ほっと胸をなで下ろす。追及されなくて良かった、またヴィラリシアの二の舞になるところだった。

そういえば、アシユリーにはちゃんと言っただけでなかったな。

アシユリーの前にしゃがみこんで、視線を合わせる。

「アシユリー。おれが魔術を使えることは内緒だ、いいな？」

「どうして？ パパはすごいのに！ あしゆり、パパがせかいいちの魔術士だってこと、みんなに知ってほしいよ！」

こんなにさらさらした目で世界一なんて言われたのは初めてで、思わず口元が緩んでしまう。

「ありがとう、アシユリー。その気持ちは嬉しいけど、これは秘密なんだ」

「ヒミツ？」

「そう。おれとアシユリーとステラとノアとフィオだけの秘密だ」

「どうして？ ヒミツがばれると、どうなっちゃうの？」

「……おれがとっても困るかなあ」

今面倒ごと巻き込まれれば、アシユリーたちとの平穏な生活も一変してしまう。それはどうしても避けなかった。

するとアシユリーは頬を上気させて、何度も頷いた。

「まかせて、パパ。あしゆり、ヒミツをまもるの、じょうずだから。あしゆり、パパのやくそく、まもるよ」

「ありがとう」

頭を撫でる。

そのあと、公園をあとにして、本屋に寄った。

魔術についての本を片っ端から見ている。

どの本も、教会の書庫にあった本と同じく、精霊と人間との歴史や、呪文を中心に載せていた。

「うーん。やっぱり呪文ありきなのか?」

魔術に関する本を、何冊か厳選して購入する。

他にも剣術や召喚術の基礎を記した本、魔力の研究書や歴史書を手に取った。今のおれには、知らないことが多すぎる。

この世界の勉強にはげむのは、もちろんおれ自身のためでもあるが、アシユリーたちのためでもあった。アシユリーは魔術士、ノアは剣士、フィオは召喚士の卵だ。学園が復興したときに困らないよう、魔術や剣術、召喚術の基礎くらいは理解して、教えられることならば、できる限り教えてやりたかった。

と、ふと極彩色の表紙が目に入った。【オススメ新刊!】とポップがついている。

「食ハンター・オルダーの最強レシピ本」……?」

ついでに購入のラインナップに加える。

なにしろ子どもたちは育ち盛りだ、ステラがいてくれるとはいえ、おれも栄養について学ばなければ。

「あれ?」

気付くとアシユリーの姿がない。

「アシユリー?」

おれは慌てて辺りを見回した。

店内を探すと、奥まった一角にその背中を見つけた。一冊の本の表紙をじっと見つめている。

ほっと胸をなで下ろす。

「絵本か?」

声を掛けると、アシユリーがぱっと顔を上げた。

「うん、大賢人リユカさまのおはなしだよ。あしゆり、このおはながいちばんすき!」

「アシユリーは、もう字は読めるのか?」

「よめるよ!」

「そうか、すごいな。フィオはどうかな」

「フィオはねえ、まだだよ。あとちよつとだよ」

なるほど。この世界では、字は六歳から習い始めるらしい。

子ども向けの参考書を何冊か見比べる。

しばらく預かるわけだし、基本的な教育もしたほうがいいんだよな、たぶん。……教育か……おれにできるかな……?」

ポケットに手を突っ込んでガムをくちやくちやくやっている後輩の姿が蘇って、無意識に

胃のあたりを押さえる。

「パパ、どうしたの？ おなかいたいの？」

「いや、ちよつと、社畜時代の古傷が……」

アシユリーは心配そうに俺を見上げていたが、やがて小さな腕を伸ばしてぎゅつと抱きついてきた。

「アシユリー？」

「大丈夫よ、パパ。あしゆりがついているからね。いたいの、すぐになくなるからね」

おなかに感じるぬくもりに、心がじんわりとほどけていく。

「ありがとう、もう大丈夫だよ」

頭を撫でると、アシユリーは嬉しそうに歯を見せて笑った。

本を買って、本屋を出る。

食料とあわせて結構な荷物になった。アシユリーも持ちたいというので、ステラたちへのお土産を持ってもらう。

「そういえばアシユリーって、魔術は使ったことあるのか？」

「ないよ。おべんきょうだけ」

なるほど、座学しか受けていないわけか。そうだよな、呪文を暗記するだけでも大変だ

ろう。

「呪文は？ 覚えてるか？」

「うん！ いえるよ！」

アシユリーは小さな手をぱつと空へ掲げた。

「いだいなるホノオのせいはいよ、われにちからをあたえたまえ！ なんじのちからをもつて、あくをうちたおせーっ！」

元氣はいいが、熱風すら起こらない。

それはそうか。本によると、魔術は要は精霊との契約らしい。意味も分からず文盲だけ並べたところで、精霊も応えようがないだろう。まずは言葉の意味を理解した上で訴えかけなければ――

そこまで考えたところで、ふと疑問が兆す。

精霊と契約を結ぶのに、本当に呪文が必要なのだろうか？

おれが知る限り、契約というよりも、なんかこう、もつと直感的というか、感覚的というか……いや、おれが元異世界人だからかもしれないが……

試しに提案してみる。

「アシユリー、呪文はいいから、イメージするんだ」

「いめーじ？」

「そう。どんな魔術まじつを使いたいのか、想像して、思い描えがくんだ。アシユリーはどんな魔術を使いたいの？」

「火！」

「うん。火を使って、何をしたい？」

アシユリーは「きゃんぷふあーいあー！」と目を輝かがやかせた。

「ぶんかさいの時ね、校庭で、みんなできゃんぷふあーいあーしたの！」

「そうか」

ちよつと安堵あんどする。

アシユリーたちは、学園で火竜かいうりゅうに襲おそわれたと聞いた。それでも、アシユリーは炎ほのおを怖こわがってはいない。キャンプファイアーは、学園での大切な思い出のひとつなのだろう。

「じゃあ、その時のキャンプファイアーを思い出して。それで、精霊さんをお願いするんだ」

「おねがい？」

「そう。学校では習なっていないかもしれないけど、呪文を唱えず、直接精霊さんに語りかけるんだ……できるか？」

アシユリーはじつと考え込んでいたが、やがてうなずいた。

「わかった」

「あ、ちよつと待って。こっちにおいで」

街の端はし、壁際かべぎわの空き地まで連れて行く。

平らな岩の上に荷物を置いた。人もまばらでちよつどいい。

「この辺がいいかな」

赤い粒子りゅうしが多く漂たなっている場所を見つけて、そこにアシユリーを立たせた。

「ここで、精霊さんをお願いするんだ。キャンプファイアーを思い出して、心を込めて」
「うん」

アシユリーは、両手を組み合わせて、目を閉じた。

白い頬にまつげの影かげが落ちる。風が吹いて、艶つややかな髪かみがなびいた。その姿ははつとす
るほど神秘的で。

花びらのような唇くちびるがほどけた。鈴すずに似た麗うるわしい声こゑが響ひびき渡る。

「せいいいさん、おねがい……！」

赤い髪が、燃えるように光を帯び——次の瞬間しゆんかん、おれたちの前に、見上げるほどの火柱かじゆが出現した。

「ちよ……!?!」

「わあ、すごい！」

平和な街の一角に、赤い炎がごうごうと逆巻く。

おれは慌てて水を出現させて消火した。

急いであたりを見回す。幸い誰にも見られていなかったようだ。密かに額の汗を拭いた。

「パパ、できた！ できたよ！」

「す、すごいな」

「えへへ」

よほど嬉しかったのか、アシユリーはおれの腕をぶんぶん振ったり絡みついたりしている。

まさか一回目で成功するとは思わなかった。

だが、これではつきりした。大切なのは、呪文という媒体よりも、むしろ直接精霊に語りかける『イメージ』だ。……それなのに、この世界ではなぜ呪文という形式が一般化しているのだろう。イメージを練ることにさえ慣れれば、はるかに効率がいいのに……

……いや、それとも逆か？ イメージは人によってばらつきがある。長い歴史の中で、

誰でも制御できるように、呪文という媒体を作り出したのか？ だがアシユリーは実際に呪文なしで魔術を発現させたしなあ。アシユリーによつほど素質があったのか、あるいは……

答えのない思考をこねくり回していると、アシユリーが空を見上げた。

「ねえ、パパ。水のおいがするね」

「んっ？」

そういえば、さつきもそんなこと言ってたな。それでアシユリーについていたら、噴水を見つけたんだっけ。

アシユリーにつられて空を見上げた。青い粒子がやけに多い。西の空に、灰色の雲が垂れ込めている。

「はやくかえろー」

「そうだな」

荷物を持ち、街を出た。アシユリーに歩調を合わせて街道を行く。

教会が見えてきた頃、鼻先にぽつりとぬるい水滴が落ちて、じきに激しい雨になった。

濡れ鼠ぬれねずみになって帰ってきたおれたちを、ステラとノア、フィオが出迎でむかえた。

「まあ、大変。今お風呂ふろを沸わかかしていますからね」

「ありがとうございます」

受け取ったタオルで肩かたを拭ふく。

髪を拭かれながら、アシユリーはステラにネックレスを差し出した。

「ステラ、いつもありがとうございます！ これ、お土産みやげだよ！」

「あら、素敵すてき！ 嬉しいわ、アシユリー」

「これはノアと、フィオに！」

「すごい、かっこいい……！」

「うさちゃん……」

喜ぶ三人を見て、アシユリーは満足げだ。雨に濡れないよう、自分がびしょ濡れになっても守ってたもんな。

「良かったな、アシユリー」

「うん！」

「じゃあ、これはアシユリーに」

おれはアシユリーに、一冊の本を差し出した。アシユリーが本屋で食い入るように見ている、大賢人だいけんじんリユカの絵本だ。

アシユリーは目をまんまるにして立ちすくんだ。

「いいの?」

「もちろん。おつかい、ついてきてくれてありがとうございます」

アシユリーの顔に、今日一番の笑えみが弾はじけた。

「ありがとうございます、パパ！」

絵本を抱だきしめてくるくると回る姿に、温かな喜びがこみ上げる。

「さあ、お風呂に入いって、ごはんにしましょう」

買ってきたばかりの食材を使つかって、今夜は今までにないくらい豪華ごうかな料理になった。

五人で食卓しょくじくを囲かこむ。

「あのね、それでね、こうえんに行いったらね、まものがおそってきたの！」

「まあ、大変」

「でもだいじょうぶ！ パパとスイレンさんが、ばしゅーんってやつつけてくれたから！」

「アシユリー、フォークを振り回すと危あないよ。フィオ、ちゃんと前まへを見て。ああ、ほら、

こぼれてる」

少女たちの笑顔が、ランプの光に柔らかく照らされる。

その光景を見ながら、おれは温かいスープをゆっくりと口に運んだ。

この子たちを預かるって決めたときは、正直どうなるかと思っただけど……なんだか、楽しくやっけていけそうだ。

屋根に、しとしとと雨の音が響く。

子どもたちが部屋に入った後、買ってきた本を整理していると、ステラが買ったばかりの茶葉でハーブティーを淹れてくれた。

「ありがとう」

「アマンの街はいかがでしたか？」

「いいところだよ。人は優しいし、店もたくさんあるし。アシユリーも喜んだ。騎警隊の副隊長とも知り合えて、何か困ったことがあれば言ってくれてさ」

「そうですか」



縫い物に目を落としながら、ステラは小さく呟いた。

「本当に、何から何までありがとうございます。ケントさんは、私たちの命の恩人です」

「そんなことないよ。逆に助けられてるし」

教会の修繕作業や、畑作り。掃除に洗濯、料理。日常生活で助けられているのはもちろん、アシユリーたちのおかげで、自分がどんなこの世界に馴染んでいつている気がする。それに、自分一人だったら、思いのほか退屈していたかもしれない。

「そういえば今日、アマンの街でアシユリーが魔術を發動させて」

何気なく言うと、ステラが顔を上げた。

「魔術を使ったのですか？ アシユリーが？」

「ああ。それも、無詠唱で」

「無詠唱で!？」

「おれもびっくりしたよ。初めてって言ってたけど、才能あるんだな」

「……………」

返事はない。

見ると、ステラは何やら真剣な顔で考え込んでいるようだった。

「ステラ？」

その横顔に話しかけようとした時、食堂の扉が開いた。

困り顔をしたノアが、ステラを呼ぶ。

「ステラ。フィオが……」

腰を浮かせようとしたステラを制して、立ち上がった。

「おれが行くよ」

ノアについて、食堂を出る。

子ども部屋に入ると、ひっく、ひっくとくぐもった声が聞こえてきた。

奥のベッド、布団がこんもり盛り上がり上がっている。その小さな藪に、アシユリーが心配そうに寄り添っていた。

ベッドに腰掛けると、その上にそっと手を置く。

「フィオ。大丈夫、大丈夫だよ」

震えるぬくもりを、布団の上からさすった。

根気強く落ち着かせていると、やがて優しい雨音に誘われるようにして、フィオがおずおずと顔を出した。白い頬に、大粒の涙が伝っている。

赤く泣きはらした目に笑いかける。

「どうした？ 怖い夢でも見たか？」

フィオの顔がくしやりと歪んだ。小さな両手を伸ばして、おれにしがみついてくる。
「いい子。いい子だ」

しゃくりあげる背中を叩き、柔らかな金髪を梳く。

と、アシユリーが袖を引っぱった。

「パパ、これよんで」

「ん」

大賢人リュカの絵本を受け取る。

アシユリーが、フィオの頭を撫でた。

「フィオ、パパがごほんをよんでくれるよ！」

「うん……」

二人に見えるように絵本を開き、字を指で追いながら、ゆつくりと読み上げる。

「大賢人リュカが、いつ、どこで生まれたのか、知る人はいませんでした。たくさんの人々が、魔王に苦しめられている時、リュカは、ある日ひとりの勇者の前に現れて、こう言ったのです——」

どうやら大賢人リュカが、勇者を導き、魔王を倒すまでの物語らしい。

子ども向けにかみ砕かれていますので、おれにとってもまたとない資料になる。

「——こうして、グリフォンに乗った大賢人リュカの導きにより、勇者は魔王を倒しましたとさ。めでたしめでたし」

そろそろ寝たかなと思つて目を上げると、フィオはららんと目を光らせていた。

「……なんで？ なんで目えかつ開いてんの？」

「パパのお話もつと聞きたいから、まだ寝たくないんだって！」

「そっかあ」

逆効果だったか。でも良かった、元気になったみたいだ。

安心しながら、細い髪を撫でる。

「大丈夫。明日も明後日も、読んでやるから」

「……ほんと？」

「ああ」

フィオはまだ少し不安そうだ。

と、アシユリーが裾を引っぱった。

「あのね、パパの服、かしてほしいの」

「ん？」

いったい何に使うのだろう。もちろんこの子たちの頼みならいくらでも貸すけれど。

「分かった、今持ってくるな」

部屋を出ようとすると、アシユリーは頑なに裾を引っばった。

「違うの、これがいいの」

「? ああ」

怪訝に思いながら上着を脱ぐ。手渡すと、アシユリーは嬉しそうにフィオのベッドに潜り込んだ。

「フィオ、いつしよにねよう。これ、パパの服、ぎゅってしてねるんだよ。そしたら寂しくないでしょ?」

アシユリーはおれの上着を抱きしめて鼻を埋めた。フィオも真似をして、顔を押し付け

る。

そのまま二人して静かになった。

……え、大丈夫か? 汗くさくないか?

試しに袖に鼻を押し当ててみる。……無臭、だと、思う……けど……

ちよつと恥ずかしいけれど、二人が安心するならいいか。それに、飼い主の服にくるまる子犬みたいで可愛い。

ひとまず安堵して、布団を掛け直していると、ノアが小さくささやいた。

「ありがとう、ケント」

「ああ。ノアは? 無理してないか?」

しつかりしているように見えても、ノアだってまだ子どもだ。まじめでまっすぐな性格ゆえに、無理をしているのではないかと心配だった。

ノアは「えっ?」と目を泳がせた。

「ぼつ、ぼくは別に、ケントの服とかなくても平気だしっ……!」

「あ、いや、そうじゃなくて……辛いこととか、悩みとかないかなーって」

「!? !? !? な、ないよっ! ない!」

「そうか。何かあったらすぐに言うんだぞ」

「分かった! もういいでしょ、おやすみっ!」

ノアに押し出されて廊下に出た。ドアが閉まる直前に見えたノアの耳は、真っ赤に染まっていた。

ちよつと長居しすぎちゃったかな。アシユリーとフィオはともかく、ノアは年頃の女の子だもん、悪いことをした。

食堂に戻ると、ステラが心配そうに顔を上げた。

「フィオは、大丈夫でしたか？」

「ああ。ちょっと寂しくなっちゃったみたいだな」

無理もない、急に環境が変わったのだ。不安になる夜もあるだろう。——あるいは、火竜に襲われた時の恐怖を思い出したか。何にせよ、一日でも早く心の傷が癒えるように、できるだけだけのことをしてやりたい。

ステラは「そうですか……」と目を伏せた。

ふと、さつき読んだ大賢人リュカの絵本の中で、気になったことを尋ねる。

「ステラ。魔王は、百年前に大賢人と勇者たちが倒したんだろ？　なんで魔王がいなくならないんだ？」

ステラは首を振った。

「それが、分からないのです。ここ数年ほどでさらに魔物が増え、様々な場所で、強大な魔物が現れはじめて……四天王が復活したのではないかという噂も流れています」

「そうか」

アシユリーたちの学園を襲った火竜も、その一端なのだろうか。

その日、雨は夜半過ぎまで降り続いた。

続きは、10月20日発売のファンタジア文庫で！